



「献血サマースクールで学んだこと」

サビエル高等学校 2年 おおくま ほのか
大熊 萌加

私が献血について知るきっかけになったのは学校でのマイプロジェクトという活動です。医療系の職業に興味があった私は将来に活かしたいという思いから、献血をテーマにすることにしました。

家族や自分自身も全く献血と関わりがなく、正直献血のことは何も知らないままマイプロジェクトは始まりました。日本赤十字社のホームページなどを見て献血についての情報を集めたり、どのような取り組みがあるのかを調べたりしました。そうしていくうちに、若者の献血離れが大きな問題になっていることを知り、その問題を中心にプロジェクトを進めていくことにしました。

まずは自分が献血についてしっかり知らなければ、と思い、夏休みに行われた高校生献血サマースクールに参加しました。献血ルームの見学や模擬献血体験、献血セミナーなどを通して、山口県内の献血状況や血液が運ばれるまでの流れを詳しく知ることができました。セミナーでは若者の献血率の低さが問題となっていることがグラフであらわされており、若者の献血離れをより大きな問題としてとらえることができました。そしてこの献血サマースクールで一番印象に残っているのは献血ルームで働く医療従事者の方との意見交換会です。医療従事者の方に「私たち高校生に献血の推進のためにできること、またはしてほしいと思う事を教えてください」と質問した際、「高校生のみなさんはまず献血について関心をもつ、知ることから始めてほしい。そのために今日学んだことをまずは家族や友人に伝えてほしい。」とおっしゃっていました。そこで改めて献血インフルエンサーとして周りの人に献血について知ってもらわなければという思いが強くなりました。

この夏の高校生献血サマースクールは私にとってとても大きな学びの場となりました。今まであまり関わりのなかった献血をより詳しく、身近に感じるきっかけになりました。若者の献血離れが問題になっている今、献血インフルエンサーになった私に何ができるのか。私はより多くの人に献血について知ってもらうことだと思います。献血に怖い、痛い、という印象をもっている人も多いと思います。ですが、献血は手術やけがなどで困っている方のいのちをつなぐ、重要な役割を担っているものでもあります。そのことが頭の片隅にでも入っていれば、ふとしたとき、献血行ってみようかなと思う瞬間があるかもしれません。献血サマースクールでの貴重な経験を活かして周りの人にもこの献血の輪をつないでいきたいです。

この先、どんな職業に就くのか、どんな人生を歩んでいくかは分かりませんが、この高校生献血サマースクールは私にとって忘れられない経験になりました。



「献血について」

山陽小野田市立埴生中学校 1年 白田 悠しらた ゆう

作文を書くにあたってなぜ僕がこの献血の作文を選んだのかというと、献血に少し興味があり助けを求めている人を助けてあげたいと思ったからです。

そもそも献血がどんなことで、何の役に立っているか分からない人もいると思うので、説明します。まず献血とは、病気の治療や手術などで輸血や血漿分画製剤を必要としている患者さんのために、健康な人が自らの血液を無償で提供するボランティアです。また、献血が必要な理由は、輸血に使用する血液は、まだ人工的に造ることができず、長期保存もできないから、そして近年、血漿分画製剤のひとつである免疫グロブリン製剤の必要量が急激に増加しているため、輸血等に必要な血液を確保するためには、一時的に偏ることなく献血に協力してもらう必要があるからです。

ここまで話を聞くと、献血に対して賛成の声や反対の声があるけれど、僕は献血には積極的に取り組むべきだと思います。その理由は三つあって、一つ目は自分自身にメリットがあるからです。献血をすると、「血液検査が無料で受けられる。」「健康診断ではわからない項目が把握できる。（併用できる。）」「血液中の異常値が把握できる。」この三つのメリットがあり、自分も相手も幸せになることができます。

二つ目は、いろいろな人達を助けることができるからです。一人一人が献血に協力することで、多くの血が集まり、さまざまな病気で苦しんでいる人達を助けることができます。

三つ目は、いまよりもよりよい社会になると思うからです。現在、あまり人と人との助け合いや支え合いが少なくなってきたと思うので、この献血というものを通して人々が自然に助け合えるような社会になるとよいなと思います。

このような理由から僕は、一人一人が献血への意識を高めたほうが良いと思いました。だからこそ自分も献血をしたいと思ったけれども、200mLの輸血は16歳から、つまり高校生からなので少し残念です。今献血をすることはできないけれども、献血についていろいろな人について知ってもらうことも、献血がまだできない人やできない人達ができる活動だと思います。

最後に、日本だけでなく、まだあまり献血が進んでいないいろいろな外国でも多くの助けが求められているかもしれません。そこで、僕は将来少しでも多くの命を助けるために、献血の仕事にたずさわっていきたくと思います。しかし、それは、かならずしも一人ではできないことではないと思うので、保護者や先生、友達など、いろいろな人への感謝の気持ちを忘れずに、生活していきたいです。

今はまだ苦しんでいる人達が多いけれど僕達が大人になったときは、輸血で苦しむ人達が少なくなる未来になるようにこれからがんばっていこうと思いました。



「若い力が救う命 ～献血の未来を築く～」

山口県立下松高等学校 1年 まえはら 前原 こはる 心春

私は週末になるとショッピングモールによく行く。すると、駐車場の一角に献血バスが停まっている光景を目にすることがある。また、献血について広めるためにチラシや風船の配付も行われており、私もチラシをもらったことがある。「献血」という取り組みが行われていることは以前から知っていたものの私は献血にまつわる知識が全くなかった。

しかし、そんな私にチャンスが巡ってきた。それは、学校でボランティアの募集があったことだ。夏休みに献血のボランティアが行われると知り、取り組みに対する理解や関心を深め、今後に生かしたいという思いで進んで申し込んだ。

そして当日、私は法被を着て看板を持ち、ショッピングモール内でティッシュの配付を行った。はじめは出入り口付近で行ったが、五人に一人くらいのペースでしか受け取ってもらえなかった。声をかけても断られたり、中には無視されたりと、とても悲しい気持ちでいっぱいになった。その時に「私だったらどうするんだろう。」と考えてみた。「おそらく受け取らないんだろうな。」というのが正直な気持ちだった。理由を挙げるなら、強く勧められると断りにくく、申し訳ない気持ちになるから、というところだろう。よく企業の勧誘活動に対して断る人が多いのを目にして私と同じように考えている人は少ないのではないかと思った。「多くの人に献血という存在を知ってもらいたい」という一心で、よく目にする出入り口での配付をやめ、店内を周りながら配付することで気軽に受け取ってもらえるのではないかと考え、行動に移した。するとこの作戦は大成功で、はじめと比べてかなり多くの人に受け取ってもらえるようになった。しかし、献血には様々な条件があるため、すべての人が献血できるわけではない。実際に、「昔はやっていたけど、もう七十歳を過ぎたからできないんだよ。」と言う方もたくさんいた。そこで、大切になってくるのは若年層の協力だと思う。スタッフの方によると、現在の二十代の献血率は最も低く全体のわずか五パーセント。逆に最も高いのは五十代だそうだ。しかし、「例年五十代あたりが献血率が高い」というわけではないようだ。どうやら現在五十代の方は、二十代の頃からずっと高い献血率を保っているらしい。この話を聞いたときはとても驚いたが、同時にこのままだと献血率は下がるばかりだという危機感をもった。そこで、若いうちから習慣的に献血することが大切だと考えた。

今回の経験を通して、まずは若い世代を中心に一人でも多くの人に「献血」について知ってもらうことが大切だと思う。「献血をする」ということは、「人の命を助ける」ことにつながる。血は人工的に作ることはできないうえに保存期間が短い。そのため、多くの人の協力が必要不可欠だ。私は困っている人の役に少しでも立つために、年齢の条件を満たしたら、献血に貢献していきたいと思う。



「ボランティアから学ぶ」

柳井学園高等学校 1年 おかむら 岡村 ゆいか 唯花

私は、レオクラブというボランティアをする部活に入部しています。ボランティアの募集のなかに、献血の呼びかけをするものがあったので、初めて参加をしました。献血の呼びかけをしたことで、知らなかったことや気付いたことが多くありました。

献血とは、病気の治療や手術などで血液が必要な人のために、健康な人が血液を提供することだということです。そのことは、もともと知っていました。献血の呼びかけをしながらティッシュを配っているとき、下を向いてスルーする人が多く、献血をしようという意思や大切さを理解している人は少ないことが、はっきりとわかりました。

「献血のご協力、お願いします。」と呼びかけていた時、年齢制限があるからできないという声を多く聞きました。そこで初めて、献血は誰でもできるのではなく、制限があることを知りました。献血することができるのは、十八歳から六十九歳の方だけです。また、体調不良、服薬中、特定の病気にかかったことのある方などは、献血することができません。献血をする人が少ない中、しようとしてもできなかつた人が、とても多かったです。ボランティアをしているとき、十代、二十代よりも五十代、六十代の方々のほうが、献血をしている人が多いと感じました。実際に、十代、二十代の献血をする人が少ないということを示したデータもあります。少子高齢化が進む中、若い世代に献血の大切さを伝えていく必要があると思います。また、献血を初めてする方や、二十回、三十回、四十回目という方もいました。定期的に献血する人を増やしていく必要があると思います。呼びかけを聞いて献血をしようと思った、と多くの方に言ってもらいました。若い世代に献血に対する理解と協力を求めるために、様々な場所で献血を呼びかけたり、献血についてのポスターを貼ったりするなど、耳で聞き、目で見ることによって、意識や理解を深めていきたいです。

私には、看護師になるという夢があり、夢を叶えるために勉強しているところです。医療に携わっていく身として、ボランティアなどで献血の必要さを理解できる人を増やせるよう、これからも呼びかけていくことを続けていきたいです。また、気軽にでき、さらには誰かの命も救うことができる、献血という社会貢献を私たち若い世代が中心になり、活発に参加していかなければならないとも思っています。私はまだ十六歳で、献血をすることはできません。献血することができる年齢になったとき、積極的に参加し、少しずつ社会に貢献していきたいです。



「献血推進」

柳井学園高等学校 2年 むらかみ 村上 くうみ 昊海

最近、献血の大切さについて学びました。献血することで他の人の命を救うことができるのだと知って、とても感動しました。だから、私たち若い世代も献血に積極的に参加すべきだと思います。

献血は誰でもできる身近な社会貢献の一つです。たった数十分の時間で、多くの人の命を救うことができます。血液製剤は病院で治療に必要な患者さんに提供されています。そのため、私たちの協力が本当に必要なのです。

また、献血することで自分自身も健康チェックができるという利点もあります。定期的な献血は自分の健康管理にもつながります。何か異常が見つければ早めの対処ができ、健康的な生活を送ることができます。

献血は他者への支援だけでなく、自分自身のためにもなる行動なのです。そして、献血することで社会貢献を果たし、誰かの命を救う喜びを味わうことができます。私たち若い世代が率先して献血に参加することで、社会全体がより良くなることを期待しています。だからこそ、これからも積極的に献血を推進し、たくさんの人々の命を支える存在になりたいと思います。一人ひとりが小さな力を合わせて、大きな影響を与えることができます。それが私たちの力なのです。

そして、献血をした人の話を聞いて、ますますその大切さを実感しました。彼らは献血を通して多くの命を救うことができ、その経験から人々の役に立つことの喜びを知っていました。私も彼らのように誰かのために何かできることがあれば、絶対にやってみたいと思いました。

献血を通して、自分の成長にも繋がることのできるなんて、とても意義深いことだと思いました。誰かのために何かできることがあるのならば、その機会を逃さずに行動することが大切です。私たちの小さな一歩が、誰かの命を救う大きな一歩になるかもしれません。



「一緒に献血に参加しよう」

柳井学園高等学校 3年 藤田^{ふじた} しおり

みなさんは、献血について考えたことはありますか？

学校や駅に、献血を呼びかけるポスターが貼られていたり、ショッピングモールでティッシュ配りをしながら、献血を呼びかけるボランティアの方々を見かけることがあると思います。そのため、献血という言葉は多くの方が知っているのではないのでしょうか。献血とは、病気の治療や手術などで輸血や血漿分画製剤を必要としている患者さんに、健康な人が自らの血液を無償で提供するボランティアのことをいいます。

私は先日学校で、献血のセミナーが行われ、急性リンパ性白血病を発症し、輸血を経験された一人の女性の体験談を聞きました。その女性が、「起き上がるのがしんどいくらいでも、輸血をしてもらおうと体が温まって、唇に色が戻って、とにかく元気になる。人間の血ってすごいんだなと思った。ぜひ私たち患者に命を分けて欲しい」とおっしゃっていました。その言葉を聞き、輸血があることで元気づけられている人、命を救われている人がいるのだと感じました。人の命を救うと聞くと、難しく感じるけれど、私たちも献血を通して、人の命を救うことが出来るのだと思いました。

現在の日本では、少子高齢化が進んでおり、輸血を必要とする高齢者が増加傾向にあることに対し、献血に協力する若い世代の人々は減少しています。特に、十代～三十代の若年層の献血者数は、この十年間で約三十二%も減少しています。献血に協力する人が少ないということは、救われる命も少なくなってしまうと考え、悲しい気持ちになりました。そのため、これから、SNSを通して、献血の流れや献血の必要性を広め、若い世代が献血してみたいと思えるような工夫をしていくと良いのではないかと思います。

私は、七月に学校で行われた献血に参加してみようと申し込みました。しかし、血管が細く、針のサイズに合わず献血をすることが出来ませんでした。また、手が冷たいため、温かくしないと出来ないと言われて看護師さんに教えていただきました。献血は「やりたい」という気持ちだけでは出来ないものなのだと、知ることができました。だから、しっかりと睡眠をとり、食事をとって自分自身の健康を保ちたい、と思うようになりました。次、またチャンスがある時は、自分のコンディションを整えて献血に参加したいと思います。

みなさんも自分自身の体調を整え、命を救うため、一緒に献血に参加してみませんか？